

バンコクのバングラデシュ人社会についての予備的考察

——タイ社会の変化とグローバル化の中で——

高 田 峰 夫

(受付 2010年5月31日)

はじめに

タイは大陸部東南アジアの中心に位置し、首都バンコクは地理的にも東アジアと南アジアより西の世界との結節点になっている。そのバンコクで、バングラデシュの人々はどのような状況にあるのだろうか。本稿は、1980年代から2010年前半までの時期におけるバンコクのバングラデシュ人社会の急激な変貌を簡単に報告すると共に、その背景をタイ社会の変化とグローバル化との関わりから考察するものである。ただし、データが質量共に不足しているため、予備的な考察に留まることを初めに断っておきたい¹。

1. 議論の背景

i) タイにおける南アジア系移民

タイは近年急速に経済発展を遂げている。タイの経済発展を支えたのは「タイ式民主主義」に基づく「開発」体制であったとされる [末廣1993]。現代タイの出発点を1958年から1963年にいたる「サリット体制」に求め、「上からの社会変革」を行った結果が急激な経済発展に結実したとする見方である²。この結果、タイは従来の農業基盤型の社会から、農業に軸足を

1 本稿は、広島修道大学から許可を得て、2009年9月から2010年3月までの半年間、タイのチューラーロンコン大学で在外研究を行った際に実施したインタビュー、収集した資料等に基づき執筆した。貴重な機会を提供してくれた修道大学と、受け入れの労を取られたチューラーロンコン大学政治学部 Boonyong Chunsuvimol 博士のご尽力に、感謝の意を表す。また、使用したデータや文献には、2008年度より継続中の文部科学省科学研究費、基盤研究C「南アジア周縁地域から日本への人的移動とネットワーク形成」(代表：山本真弓)の一部を利用して収集したものが含まれていることも併せて記しておく。

なお、バングラデシュの人々に対するインタビューは全て筆者がベンガル語で行ったものを、適宜日本語訳して、そのまま提示する。また、固有名詞の表記に関しては、引用する論者の表記をそのまま採用するため、文中で必ずしも一貫しないことがある。

2 タイに関する研究は日本だけでも膨大にあるため、ここではあえて個々には言及しない。タイの歴史から現状を俯瞰する比較的最近の研究としては柿崎 [2007] を、タイの近代国家から民主化の時期までの展開については末廣 [1993]、その後の展開については末廣 [2009] 参照。また、タイについての基本的な知識は日本タイ学会編 [2009] にまとめられている。

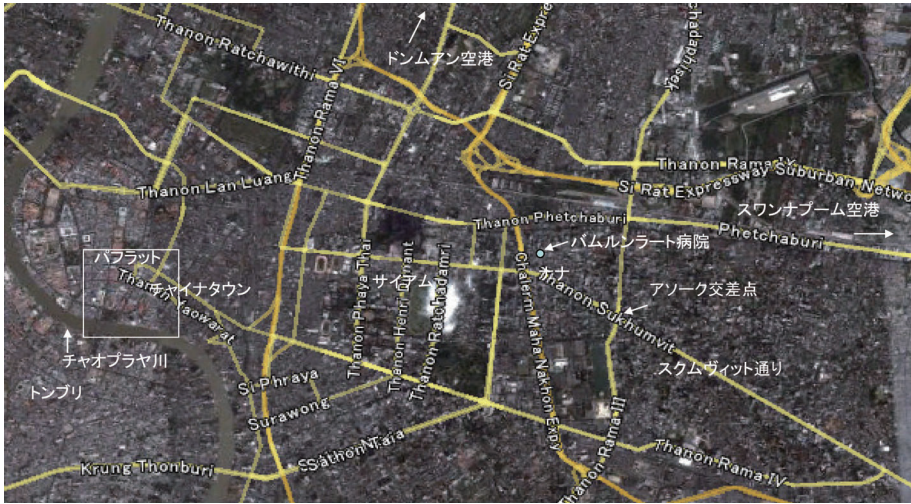


図 1：バンコク中心部地図と主要関連地名
(出典：Google Earth をベースに筆者が加筆)

残しつつも工業化を達成した中進国に変貌しつつある。また、首都バンコクは周辺部を含めれば人口1000万人以上の大都市であり、中心部には欧米や日本のブランド・ショップが多数入ったデパートやショッピングセンターが林立している。

そのバンコクを歩いていると、意外なほど多くの南アジア系と思しき顔に出会う³。彼らの一部は、すでにタイ国籍を持つ人々であり、またそれと並んでニューカマー移民や、ビジネス・観光等で一時的に滞在中の人々も多い。バンコク中心部からその周辺を歩いてみれば、都市バンコクの人口の無視できない比率をそれらの人々が占めていることだけは疑いようが無い。ここでは先行研究を振り返る形で、彼らの大まかな姿を捉えてみたい。

まず、1980年代以前に遡るオールドカマーとしての南アジア系移民について見てみよう。この分野では MANI [1993] と佐藤 [1995] が代表的なものである。タイの南アジア系の歴史について、これらを基に簡単にまとめてみる。

タイの南アジア系移民で比較的初期に登場したのが19世紀前半のタミル系で、彼らは半島部で牛商や宝石堀に従事していたようだ。その後、19世紀の第3期にモンクット王が近代化路線を取り始め、バンコクに入り始めた英国人の付き人としてバンコクへ南アジア系の人々も多数が移入し始めたらしい。彼らの中にはヒンドゥとムスリム両方がいたとされる。ムスリムはタイから牛を輸出し、また宝石商としても成功して、ニューロードの中央郵便局付近

3 本稿では「南アジア系」と「インド系」の両方の言い方を混在させるが、それは論者によってその両方がほぼ同一内容で用いられていることによる。実際、タイの状況を考えれば、これらはほぼ同じ内容と考えて差し支えない。



図2：パフラット市場とバングラデシュ人集中地区

(図1のバンコク中心部地図の四角い囲み部分を拡大。出典：バンコク市公式地図をベースに筆者が加工)

に不動産投資した。その後、パンジャブ人やウツタル・プラデシュ (UP) からのヒンディー語話者が入り始め、第一次大戦後に目立つようになる。彼らは布商や警官にもなり、UP系は主に英国人の警備員としても活躍したらしい。ところが、1947年の印パ分離でパキスタンを逃れたパンジャブ人、特にシク (シク教徒) が急増し、現在のように彼らが主流になった。彼らの多くは、チャイナタウンの西側に当たるパフラット (Pahurat) 通り周辺からチャオプラヤ河を渡ってトンブリ地区に集中した。さらに1970年代になり、ヴェトナム戦争遂行のため駐留したアメリカ軍やアメリカ関連需要を見込んだシクやシンド系の人々がスクムヴィット (Sukhumvit) 通りに進出したという。

南アジア系 (広義のインド系) の人々は、こうしてタイ、とりわけバンコクの中で重要な位置を占めるようになる。特に、パフラットを中心とする一帯からプラトゥーナム周辺での布商、スクムヴィット通り周辺の仕立て屋や「インド」料理店等々では圧倒的な存在感を示している。にもかかわらず、彼らの存在は、それとは不釣り合いほど認知されていない。こうしたインド系の人々のあり方が、むしろ彼ら自身が集団として目立たないように意図的に振舞った結果だとして、HUSSAIN [1982] は彼らを「サイレント・マイノリティ」と位置づける⁴。インド系の人口規模について、MANI [1993] は先行研究を比較検討し、タイ全土で

4 タイ政府の側も南アジア系の人々のことを大して問題視していないようだ。例えば、タイの移民関連に関する比較的最近の報告書である SCIORTINO and PUNPUING [2009] の中でも、南アジア関連では唯一ロヒンガ問題 (Rohingya, ロヒンギャ。ビルマ・アラカン州のムスリム。南アジア系と

1990年代初頭に最大で10万人程度とし、その大半がバンコクに集中しているとする。これは「サイレント・マイノリティ」というには大きすぎる規模ではないか。しかも、近年は、これらオールドカマー（比較的早期に移入してきた人々）に加えて多数のニューカマー（新移民）が登場している。にもかかわらず、彼らの実態は相変わらずぼやけている⁵。

ところで、上掲3研究は、「インド系」の中にムスリムがいたこと、彼らの存在が初期のタミル・ムスリムやアハメダバード出身のムスリムを初めとして重要であると処々で言及しつつ、基本的にはシク等のパンジャブ系と UP 出身ヒンドゥ教徒中心の議論に終始した。南アジア系ムスリムについて実態は不明なままであり、これらの研究を見る限り現在のバンコクでは南アジア系ムスリムが存在しないかのようでさえある。こうした印象を受けるのは、これらの研究がシクやヒンドゥに偏っているためばかりではない。別の要因を考えてみる必要がある。それは端的に言えばタイにおけるムスリム全体の位置づけの問題である。

ii) タイ・ムスリム

タイ国外でタイ研究を牽引してきたのはアメリカである。スキナーやエンブリーに代表される議論は、タイ社会自体の理解とタイにおける「華僑の同化」テーゼで、タイを比較的等質な社会と位置づけてきた。その結果、「ムスリムやラーオ人、中国人商人は、その存在に言及はあっても、タイ社会の構成者とはみなされず、特に「問題」ではない限り、検討対象とはならなかった」[小泉2006: 457]という。ムスリムに関して言えば、皮肉にも「問題」となった（なり続けている）「南部」の「マレー系ムスリム」は検討対象とされたが、それ以外のムスリムは事実上、無視されているのに近い現状がある⁶。こうしたタイ研究の現状は、つまりは「タイ社会」研究が本来的に持つ制約であり、「タイ社会についての見方・捉え方」自体が持つ制約であるともいえよう。

他方、タイ社会自体の側には別の要因があるようだ。HUSSAIN [1982: 4] はタイにおける南アジア系の人々が研究されなかった理由として、C.Keyes 説を紹介している。それによれ

- 密接な関係にあり、難民・ボートピープルとして周辺諸国で問題化)のみ扱われ、それ以外の言及はない。
- 5 いかにかの姿が「見えない」ままであるかは、次のような記述が例証する。「タイ在住のインド人の大半は南インド出身のシーク教徒」。これは、日本タイ学会編 [2009] の最新の『タイ事典』中の「インド人」項目の記述である。南アジアについて少しでも知識がある人ならば、「シーク教徒」(=シク)が「南インド」出身者と聞くと驚くに違いない。しかし、タイ研究者の間では、この程度の認知しかされていないのである。一般のタイの人々にとっては、なおさらであろう。同じ項目は、次のように事情を説明する。「人口センサスからインド人の人口は判明しない」[同上]。基本的な数さえも分からない、これがタイにおけるインド系(南アジア系)の現状である。
 - 6 例えば、タイ・ムスリムに関連する最新の論文集として SATYAWADHANA and PUAKSOM eds. [2009] があるが、収載されている9論文のうち、7本までが南部のマレー系ムスリム関連で占められている上に、残り2本はいずれも2・3ページの短文でしかない。日本のイスラーム研究者の目も南部に向かう傾向が強い(例えば、小河 [2009])。

ば、タイは公式には「基本的に等質な社会」(basically a homogeneous society) であるとされているために、タイ語を話さないマイノリティ諸集団はそのイメージを崩しかねないものとして存在を見落とされてきたのだという⁷。いわば、タイの「自画像」がもたらす影とも言えよう。これに極めて類似した状況が宗教に関してもあるように思える。すなわち、タイが仏教国であるだけでなく、国王がタイ仏教の庇護者と位置づけられているため、国内におけるムスリムの存在が、地域的なマジョリティである南部のマレー系ムスリムを除けば、ほぼ閑却されている状態にあると考えられる。

さて、「タイ・ムスリム」とはどのような人々なのだろうか。この点に関する最も包括的な研究はチットムアット [2009a] であろう。タイのムスリムを歴史的来歴から現状まで幅広く触れた上で、タイ・ムスリムの置かれている現状を、バンコクのムスリムと南部三県のムスリムに比重を置いて紹介している。中でも、タイ・ムスリムとその系譜にふれた部分 [同：681-683] が興味深い。それによれば、現在のタイ・ムスリムは10系統からなるとされる。(1)マレー系、「最多のムスリム人口をなすグループ」。(2)ジャワ系、「今日のインドネシア人を出自とするグループ」。(3)アラブ系、「スコータイ (1240?-1437) 期以降、商交易で栄えた」。(4)ペルシア系、「アユタヤー期に渡来し、ラタナコーシン (現バンコク王朝) 期まで経済・政治的な役割、さらにイスラームの活動でも重要な役割を担った」。(5)チャム系、「一部はトンブリーに、他の多くはアユタヤーに残留」。(6)クメール系、「バンコクのバーン・クルアのタイ・ムスリムの祖先」。(7)ラオ系、「タイ国内の各地とりわけ東北部に流入して定住」。(8)ビルマ系、「多くは北部タイに定住」。(9)インド人、パキスタン人、バングラデシュ人、アフガニスタン人の系列、「このグループは「パートナー」と呼ばれる」。(10)中国系。

多様な系列の人々から成るタイ・ムスリムであるが、共通点もあるという。大まかに要約すれば、①状況に応じつつも、文化様式等で一定の伝統保持。②一つの「イスラーム」意識を保持。③ムスリム集団間で通婚関係発生。④非ムスリムと通婚する例も多い [同：683]⁸。

同時に同著者の別の論考は、タイ・ムスリムに関する3種の資料を紹介している [チットムアット：2009b]。すなわち、①「タイ国内のイスラーム関係組織と活動に関する基本資料」、②「タイ社会におけるイスラーム組織」、③「2002年度行政改革によるイスラーム関連業務の運営」である。①は、主に関係法令等の資料である。②は「1997年イスラーム組織運営法に基づく運営組織」についてであるが、いわゆる「タイ・ムスリム」についてで、外国人な

7 引用の原典は以下の通り。ただし、筆者はこの文献を未見なので、HUSSAIN の引用するままで言及するに留める。Charles Keyes, 'Ethnography and Anthropological Interpretation in the Study of Thailand', Elizer B. Ayal ed., The Study of Thailand, Ohio University Center of International Studies, Southeast Asia Series, N.54, 1975, p.11.

8 この場合には基本的に非ムスリム側がムスリムに改宗することが通例であるようだ。ただし、筆者が個別に確認した中には、改宗せずに結婚した例も少数だが見られた。なお、タイのムスリムについての先駆的研究として、今永 [1992] も参照。

いし外国出身ムスリムについての記載はないようである。③は国内のイスラーム関連業務についてであり、「2000年国勢調査によるタイ・ムスリム人口」が県別に表示されている。これによって、全国では約280万人弱のムスリムがいること、そのうち約225万人は南部のマレー系ムスリムであること、バンコク近郊には約33万人集中すること、その他の地域では極めて少数であること、等が明らかになる⁹。

iii) タイの中の南アジア系ムスリム

ところで、チットムアット [2009a] の分類の (9) 「パートナー」系について、彼女は次のように記す。「主に商交易で流入し定住した。多くが商売から派生したかつての職業に従事している。その一部はバンコクに生活拠点を構えるが、末裔の多くはタイ国内各地に移住した」[同：682-683]。また、チットムアット [2009b] を見ると、言及されている資料は「タイ・ムスリム」についてのものであり、南アジアや西アジア出身ムスリム等は数に含まれていないように見える¹⁰。とすると、「タイ・ムスリム」の中に溶け込んだ南アジア系ムスリムの子孫が少数いるだけで、それ以外には南アジア系ムスリムは存在しないようにも思える。しかし、実のところどうなのだろう。

GILQUIN [2005] は、タイのムスリム社会について、その歴史から現在までを幅広くまとめた研究である。そのうち「海を通じた接触」[同：10-14] は、インド人、トルコ人、アラブ人、マレー人との接触の歴史を扱い、最南部ではタイの拡張期にイスラーム化が生じたことを指摘する。さらに、「タイにおけるムスリムの他の源流」[同：20-22] では、①広義のインド系、②チャンパ（チャム）、③マカッサルについて簡単にまとめるが、このうち注目されるのはインド系ムスリムについての記述である。少々長くなるが引用してみよう。「ナレスワン王（治世1590-1605）が（現ビルマ＝ミャンマーの）Tenasserim を征服した時、多くのインド系ムスリム交易商（Indian Muslim traders）がおり、彼らは Moulmein, Tavoy, Mergui 等の海岸に何世代にもわたり地歩を築いていた。その多くは近場のベンガルから来た者たちで…」[同：20]。「ナライ王（治世1656-1688）はベンガル人の財務大臣を抱えていたと言われ、さらに彼の個人的護衛はインド系ムスリムを含んでいたとも言われている」[同：21]。「1830年にはチッタゴン出身の小規模なベンガル人コミュニティがチェンマイに居

9 この記述に関して疑問を感じたので、筆者が同著者に面談し、直接確認したところ、意外な回答を得た。①国勢調査に記載があるから、そのまま記したが、実は数字に確証はない。確認するための統計的なデータも一切無い。②自分（＝著者チットムアット女史）も含め多くのムスリムの研究者や指導者たちは、実はもっとムスリム人口が多いと推定している。特にバンコク内部や周辺では統計よりも遥かに多い可能性が高いと考えている。③しかし、調査に関する費用が出ないだけでなく、調査自体されていないために、確認する手段がない、とのことであった。ここにも、先に言及したタイの「自画像」が影を投げかけているようだ。

10 この点も著者に確認したが、基本的にその理解で間違いはない、とのことだった。

を構え、モールメインとの間で牛の交易を行っていた」[同上]。つまり、タイの王朝の中ではベンガル人ムスリムが重要な位置を占め、また、交易、特に牛の取引をめぐり、チッタゴン出身者がチェンマイに定住するまでになっていた、というのである¹¹。

それでは、バンコクにおいてはどうだったのか。同じ研究は、次のように記す。「19世紀以降、インドからの移入者は、特にバンコクへ、数が限られながらもコンスタントな規模で続いていた」。その多くはムスリムだったが、ヒンドゥーやシクもいた。ただし、ヒンドゥーやシクが内婚的であったのに対し、ムスリムは現地の女性と通婚し、より容易に現地に溶け込んだ、という[同：21]。また、坪内[2002]は、19世紀中葉以降のバンコク形成史を、主に『郵便職員のための市内住民リスト』を手がかりに検討した研究であるが、その中に次のようなくだりがある。「郵便住所録において外ニューロードの住民として登録されているのは、(中略) 有人家屋1,137戸」だが、そのうち「64戸(5.7パーセント)がマレー人およびその他のイスラム教徒」[同：25]と指摘する。他方、家屋配列を検討した部分では「マレー人あるいはインド系イスラム教徒は」[同：27]と記されていることを見ると、先の「その他のイスラム教徒」とは実質的に「インド系イスラム教徒」とほぼ重なると考えられる。つまり、初期バンコクの都市住民の中に「インド系イスラム教徒」が一定数いたことは間違いない。

しかし、現在確認できる資料の範囲では、その後の南アジア系ムスリムの存在は目に見えてこない。中東系ムスリムに関しては、先ごろ亡くなった中東系ムスリムの大物であるナナ氏が不動産を所有していたことから、バンコク市内スクムヴィット通り西部の地名として「ナナ」となり、さらには高架電車(BTS)の駅名にまで採用され、一帯が「アラブ人街」として広く認知されたことにより、一定の存在感を持って現地の人々に受け止められている。ところが、南アジア系の人々は彼らが意図的に自らを「サイレント・マイノリティ」と位置づけた経緯に加え、その中心を占めた人々がシクやヒンドゥーであったことから、彼らの中のムスリムの姿は見えないままである。また、南アジア系ムスリムは、同じムスリムとしてタイ・ムスリムの人々と交流を持ってきたことは断片的に知られている。特に、礼拝の際にモスジッドで交流があったことは、あちこちで聞かれる。ところが、タイ・ムスリムがタイの「自画像」に合わない存在として、南部マレー系集中地域以外では、その存在が限りなく無視に近い状態に置かれてきたことから、そもそもタイにおいては南部以外でのムスリムの実態が必ずしも判然としない。これら複数の事情が重なって、南アジア系ムスリムの実態はおろか、彼らについての最低限のデータさえ存在しない状態である¹²。まさに、彼らは現代タイにおける「マイノリティ中のマイノリティ」というべき存在なのである。

11 このうち、「チッタゴン出身者」に関連する研究は、いずれ別の機会に報告したい。

12 筆者は、チットムアット氏を始め、複数の自身がムスリムである研究者にインタビューを行い、南アジア系ムスリムについての情報や統計的なデータの在り処を探った。その結果、彼らが口を揃え、

2. バンコクのバングラデシュ人社会とその急激な変貌

バンコクの南アジア系ムスリムについて全般的な情報がほとんどない一方、筆者は以前から特にバングラデシュの人々（筆者が主要な研究対象としてきた人々）の姿をバンコク市内の特定地域で頻繁に見出していた。この節では、南アジア系ムスリムの中でもバングラデシュ・ムスリムに焦点をしぼり、彼らの近い過去の状況（20～30年前）と近年生じている彼らをめぐる急激な環境変化を、聞き取りや傍証をかき集める形で炙り出してみたい。

i) 一方通行の関係？

まず、バングラデシュ側での状況から話を始めたい。筆者がバングラデシュと関わり始めたのは1988年である。当時、高級ホテル内のレストランを除けば、首都ダッカには限られた数の「外国」料理店があるだけで、その多くは中華料理店ないし欧風料理店であった。唯一、その例外だったのは、チッタゴン（同国東部に位置する第2の都市）の中心街からやや外れた所にあった「タイ・中華」(Thai-Chinese) 料理店である。チッタゴンが港湾都市であることから、主にタイ人船員や、タイ料理になじみのあるそれ以外の船員をターゲットにした店であったと記憶している。ところが、1990年前後に、この店がダッカに進出した。周知のようにタイ料理は、南アジア系の料理とは異なるものの、中華料理に比べればかなりスパイスを用いること、特に辛いことで有名である。また、先述の通り、タイにはムスリムが多数おり、それらの人々向きのムスリム・タイ料理や、マレー料理も豊富にある。言うまでも無く、これらはムスリムの食物禁忌に抵触しない「ハラール」食である。恐らくこうした事情のためであろうが、ダッカの都市生活者たち（当時、ようやくその姿が見え始めたムスリムを中心とする「都市中間層」）にすぐに受け入れられた。このため、既存の「中華」料理店は、そのほぼ全てが「タイ・中華」料理店に一斉に看板を代え、メニューにもタイ料理を大幅に取り入れただけでなく、新規の「本物の」(authentic) を謳った「タイ・中華料理店」が雨後の筍の如く登場した。その前後にカルカッタ（コルカタ）を訪れる機会があったが、そこ

て証言するのは、タイ・ムスリムについての情報さえ極端に不足していて実際のところは良く分からない。まして南アジア系ムスリムについての情報やデータなど自分たちは聞いたこともないし、恐らく存在しないだろう、とのことであった。また、ここにはムスリム独特の人間関係も関わっているようだ。つまり、ムスリム同士は同じ「1人の」ムスリムとして他のムスリムと関わるために、様々な国や地域からムスリムがタイに来て、そのかなりの部分が半ば定住していることは「個別に」熟知しているにもかかわらず、それを超えて、「どの国の」とか「どの地域の」という集団レベルでは把握しようとする意識がないために、結果的には、ムスリムの間でも他地域から来るニューカマー・ムスリムの実態は判然としないのである。しかも、どうやらこれはニューカマー・ムスリムについてだけではなく、すでにタイ国籍を得たオールドカマー・ムスリムについても、ある程度まで当てはまるようである。

ではこのような変化を見なかったから、恐らくこれはダッカに特有な現象だったと思われる。

時間的な経緯でいえば、後述するように、主にムスリムの間でだが、バンコクに短期・長期に滞在したり、または中継点としてバンコクを経験したことのある人々（ほぼ男性）が、すでに1980年代中期から徐々に登場し始めていた。それゆえ、「タイ・中華」料理店の激増は、食のスタイルとしては、これらのバンコク経験のある人々から始まり、その周囲に広がり、さらには一般の人々の間で広まったのであろう。また、確認は取れていないが、恐らく、新規に「タイ・中華」料理店を始めた人の多くはバンコク経験者だったのではないか。

バングラデシュ側、特にダッカでは、このような形で人々の目に見える形で「タイ」が日常生活に入り込み始めた。その後、タイにおける自動車産業の急展開で、タイが「東洋のデトロイト」と呼ばれるようになり、バングラデシュにはタイから輸入されたタイ製日本車を初めとする各種製品も多く見られるようになった。他方、バングラデシュからタイへ、人は行くものの、輸出はないに等しい。圧倒的な貿易不均衡である¹³。バングラデシュ側の目からはタイの姿が目立つようになったのに、タイ側からはバングラデシュ（人）が視野に入らない。先に見た、南アジア系ムスリムがタイにおいて「マイノリティ中のマイノリティ」である状況には、実はこのような部分も影を落としているようだ。

ii) パフラットの片隅で

先ほど、バンコクの特定地域でバングラデシュの人々の姿を頻繁に見出した、と記した。それはパフラット地区である。パフラット地区はチャイナタウンの西に延びるパフラット通りとその周辺一帯であり、いわゆる「インド人街」として、バンコクの人々に知られている。パフラットの歴史的背景を、友杉 [1994: 76-77] は次のように説明する。18世紀後半、内乱を逃れてバンコクに移住してきたベトナム人が国王からこの地を賜って居住したことから、かつてはバンユアン（ベトナム集落）と呼ばれた。膝まで水に浸かるひどい湿地帯であったが、ラーマ五世時に大火で集落は消失し、その焼け跡を復興して、大きな道を建設し、パフラット道路と名づけた。以後、インド人が集住するようになって、パフラットは衣類を商う市場として知られるようになった、という。この地域の中心には、シクのグルドワラ（寺院）があり、遠くからでもその存在を誇示してきた¹⁴。

13 ジェトロがまとめた国別統計では、バングラデシュからタイへの輸出は統計上に表れない、つまりほとんど数に入らない程度の規模である。他方、タイからバングラデシュへの輸入は、2007/2008年度には第8位、金額で5億ドルに上り、全輸入金額の構成比で2.3%を占めている。その上、2005/2006年度から2年間の伸び率が20.4%を示す通り、順調な増大傾向にある (http://www.jetro.go.jp/world/asia/bd/stat_02/, http://www.jetro.go.jp/world/asia/bd/stat_04/)。なお、同じ統計のタイ側からの輸出入で見る限り、そこには国別でバングラデシュの名前は見られない。タイ側からすれば、輸出超過とはいえ、問題とするに値しない程度の規模でしかないのであろう。

14 この地区とインド系の人々については、主にシク限定ではあるが、NAKAVACHARA [1993] 参照。↗

北はパフラット通り沿いから、現在は「インディアン・エンボリアム」となったグルドワラの南側一帯まで、表はチャカペット通りの両側から西はトリベット通り沿いまで、パフラット市場とその周辺は、まさにインド人街と呼ばれるに相応しく、ほとんどあらゆる店でインド系の人々を見かけるか、または現地の人を雇っていてもインド系がオーナーである。しかし、不思議なことに、そこで南アジア系ムスリム（バングラデシュ、パキスタン、タミル・ムスリム等の人々）を見かけることはほとんどない。

バングラデシュ人たちが多く見られたのは、パフラット地区でも外れに当たる一角である。パフラット地区でインド系（特にシクの人々）が集中していたパフラット市場側には、後発組として、または、ムスリムであったために、進出することができなかったのだろう。そのため、バングラデシュ人たちは、グルドワラからチャカペット通りを挟んだ東側、オンアン水路との間の帯状に縦に伸びた地区の、それも表通りから路地を少し奥に入った一角に集中していた。狭いオンアン水路を越えれば、そこはもうチャイナタウンである。筆者がこの一角を知るようになったのは、一本の路地の入り口の角にあった小さな旅行代理店がベンガル語の手書き掲示を出していたからである。A4 サイズのコピー用紙に太字のサインペンで「ここでバングラデシュ（行き）のチケット入手可能」と書かれた釣り書きが、ガラス窓一面にベタベタ張られた航空会社のステッカーの片隅に埋もれて、遠慮がちに見えていた。気になって薄暗い路地を覗くと、何とあちらこちらと数人ずつ男ばかりが固まりになり、ワーワー大声でまくし立てていた。それが全て懐かしいバングラデシュ・ムスリムのベンガル語であることに気づき、非常に驚いたのを思い出す。確か1990年の後半、第1次湾岸戦争頃のことだった。路地に踏み込んでみると、狭い道を塞ぐように男たちが固まりになって立ち話に夢中になっているため、その間を肩をすくめて通り過ぎなければならぬほどであった。路地の中には、数軒の店があり、窓にはいずれもベンガル語で「ルイ・マーツ（鯉 [の料理]）あります」、「電話カードあります」等と手書きで記してある。店の経営者は多くはヒンドゥーやシクのようなようだったが、店の中も外も、目に付くのはほとんど全てがバングラデシュ・ムスリム男性だった。ともかく、男たちの妙な熱気と、こちらに向けた誰何するような眼差しが印象的だった。当時はこの光景を面白いと思いながらも詳しく調べなかったため、どの程度の方がここに集中していたか、今ではそれを確認することが出来ない¹⁵。ただし、日本に結果的

また、HUSSAIN [1982], MANI [1993], 佐藤 [1995] 等も参照。

15 タイにおける国際移民の問題を広く扱った研究である STERN [1998: 5-6] の中に1995年度と1996年度の入出国者を国別に示した表がある (Table 3: “Arrivals into Thailand by Gender and Nationality: 1995-1996”, Table 4: “Departures from Thailand by Gender and Nationality: 1995-1996”, Source: Immigration Bureau; Annual Report)。これによると、1995年のバングラデシュからの入国者数（男性48,296人、女性3,530人）、1996年の入国者数（男性38,792人、女性3,377人）に対し、1995年の出国者数（男性18,759人、女性3,317人）、1996年の出国者数（男性20,443人、女性3,185人）であり、入出国者数を比較すると、女性はほぼ全員が出国しているのに対し、男性は入国者に比べ出国

に不法滞在することになった、あるバングラデシュ出稼ぎ労働者に関する記録に次のような記述がある。(時期は、明記されていないが、1980年代末ないし1990年前後らしい)。

「バングラデシュの若者が憧れる欧米の文化、商品は全てバンコクを經由してやってくる。しかも、バンコクでは商品も割安だ。日本へ来るバングラデシュ人はほとんどバンコクで身の回りの品を整え、しっかりキメて日本入国に備えるのが通例である。バンコクのゲストハウスでは、これから日本へ行く身支度をする者が、日本から帰国する前にバンコクで羽を伸ばそうとする者に出会い、日本の情報を入手する。ここでは、また、日本で滞在先や仕事先の情報を売るブローカーも暗躍している。」[菅原1993: 27-28]

文中で「バンコク」と抽象的に記されているのは、詳しく言えば、上で言及したパフラット外れの一角のことであり、そこには記述の通りゲストハウスが軒を並べていた。また、当事者の次のような証言もある。現在もなお同地に小さな店を持つバングラデシュ人の M 氏は、1986年頃から日本に5年間滞在したことがある。2010年初頭、彼にインタビューした際、このパフラット外れにきた経緯を、「日本を出た後、ここに直接来たんですか、それともクニ [=故郷、バングラデシュ] に行ったんですか?」とたずねてみた。すると、彼は答えた。

「いや、いや、クニへだ、クニへ。それからここに来た。クニにいたのは2・3年かな。それから、また(来た)。ここは以前から知っている。行く時(=日本へ行く際に)、ここに来た。ここから(日本に)行ったんだ。当時は、ここに沢山のバングラデシュ人がいた

者が1995年に約3万人、1996年に2万人弱少ない。通常タイでは1年以上の長期滞在ビザは特別の例外を除き出ないようであるから、単純に推計するなら、この2年間だけで合計5万人弱がオーバーステイ状態になっていたことになる。他の南アジア諸国を見ると、同様の計算で、インドの例では男性が1995年に約2.4万人、1996年に約2万人少ない。ただし、インドの場合は人口が大きいことを考える必要がある。パキスタンの場合は、男性が1995年に約4500人、1996年に約2700人少ない。全体の入国者数がバングラデシュとほぼ類似していること、当時の人口規模も比較的近いことを考えると、バングラデシュの場合はパキスタンに比べて推定オーバーステイ数が約7倍もあることは注目に値する。

他方、外国人登録(同: 28, Table 9: “Aliens Registered in Thailand, by Nationality and Gender, 1994-1995”)を見ると、1995年と1996年の2年間の数値が主要国別に掲載されている。圧倒的に多い中国人(男女合計約23万人)を除けば、インドがそれに続く多数を占める(1994年1995年共に男女合計約6,000人)。他の南アジア系は、パキスタン(両年ともに500人弱)、ネパール(両年とも151人)があるだけで、バングラデシュを含めてそれ以外の国名は見当たらない。これらの数値は、両年ともほぼ同じだから、永住許可者ないし事実上の永住者が大部分を占めるのではないか。国籍不明が総数で両年7,000人前後であるから、その中にバングラデシュ系が含まれる可能性はあるが、ネパールの数値から考えると、最大でも100人以下と推測される。以上を総合すれば、1990年代中頃まで、バングラデシュからタイに来た人々の中には、人口比からいっても入国者数から言っても、異常に高い比率で多数の不法滞在者がいたこと、彼らがバンコク在住バングラデシュ人の主流を成していたこと、等が推測される。その彼らの集中地点がパフラット外れのこの一角だった。

ちなみに、これらの数字の典拠となった Immigration Bureau の Annual Report を探したが、一般公開されていないだけでなく、チュラーロンコーン大学人口問題研究所の研究者たちでさえその入手方法を知ることが出来なかった。著者の STERN がどのようなルートでこの統計を入手したのか不明だが、この意味では貴重な資料と言えよう。なお、1980年代以降のタイのニューカマー労働移民に関しては浅見 [2003] 参照。

からね。沢山いたよ。』

つまり、日本から1991年に一度バングラデシュに戻り、それから1993年ないし1994年頃パフラット外れの場所に戻ってきたこと、ここで開業することを決めたのは、1986年に日本へ行く途中で立ち寄った経験があったからであること、当時は（恐らく、1986年時点も、1993～94年当時も）非常に多くのバングラデシュ人が、この一角に集まっていたことを語っているのである。

1986年といえば、当時ヴィザなしで入国できたことから、多数のバングラデシュ人、パキスタン人、イラン人等が各種名目で入国し、日本のバブル前の好景気と人手不足を穴埋めすべく、実質的には出稼ぎに精を出していた時期である¹⁶。その数があまりに多数に上ったため、一時は京成線上野駅地下コンコースが彼らで埋め尽くされ、休日には上野公園や代々木公園に彼らの多くが集って、多くの人が不安視し、批判をしたのもこの頃である。その後、入管政策が変更になり、ヴィザなし渡航は廃止された。M氏は、まさにその時期に日本にいた人々の1人であった¹⁷。M氏の証言から、当時の日本でのバングラデシュ人労働者（日本の入管側から見れば不法就労者）急増の前進基地となり、彼らのネットワークの結節点ともなっていたのが、バンコクのパフラット外れにある、この小さな一角であったことが浮かび上がる¹⁸。つまり、バンコクが東アジアと南アジアを繋ぐハブとなっていたのである。

iii) 「マージナルな場」の「マージナル・マン」

バングラデシュの人々が集中していた一角は、西をインド人街であるパフラット市場、東をチャイナタウンに挟まれた、まさに狭間のような場所である。表のチャカベット通りから、裏のオンアン水路まで、奥行きにして東西30メートル程度、南北に広がっているとはいえ、せいぜい200mあるかどうか。この狭い場所に、当時は多数のゲスト・ハウス（安宿）や食堂、旅行代理店がひしめき、そこに、一時は多数のバングラデシュ人が集中していたのだから、壮観であった。その多くは、日本へ向かう途中、もしくはバングラデシュに戻る途中に、短期間滞在した人々であった。それ以外にも、複数の人へのインタビューから、各種雑貨、衣料品等を買付けするためにもバングラデシュから常時多くのバイヤーがこの一角を訪れていたことが判明している。

ところで、バングラデシュの人々が集中していたこのパフラット外れの一角は、元々どのような場所であったのか。Van ROY [2007: 297-313] は、オンアン水路に架かるハン橋

16 この時期の東京近辺におけるバングラデシュ人労働者の状況は、吉成 [1993] 参照。

17 当時の「出稼ぎ労働者予備軍」としての教育を受けた若年層失業者の問題については、村山 [1993: 151-156] 参照。また、最近の出稼ぎ動向については三宅 [2009a] 参照。

18 バングラデシュ側での基点となっていたのは、オールド・ダッカのイスラムプールだったが、この点について、詳細な調査は行っていないので付記するに留める。

(Saphan Han) を中心とするサムベン街 (Sampheng Lane) 西端地区について、概要次のように記す¹⁹。市の掘割 (= オンアン水路) に沿い、その西側には市の外壁があった。しかし、洪水等で何度も崩壊したことや、1912年の崩壊直後の1913年には不況があったこと等から不吉とされ、公共事業省が門の撤去と同時に外壁の撤去も行った²⁰。そこに中華街から溢れた人々等が徐々に流れ込んで、現在の状態になる。また、掘割は、護岸が崩れて、それを修復するたびに人々が徐々に占有して掘割の幅が狭くなり、現在のどぶ川状態になる、と。

つまり、バングラデシュ人たちが集中したパフラット外れの一角を含む南北に細長い地帯は、元は「市壁」の下と、市の「掘割の護岸」だった場所なのである。しかも、それには歴史的な背景があるようだ。

再び同書を要約してみる。市の掘割は、市壁と一对で王宮を中心とする市街の外周を区画する標識だった。また、この掘割から東にある Mahachak 運河までの幅 300-400m の細長い土地は元々、市街と港や商業地 (後の中華街) との間の緩衝地帯として設定された土地で、当初は軍や警察施設、後には公務員宿舎等が散在する閑散とした空間だった。それが、軍や警察の集約と中華街の人口圧力に押される形で徐々に民間に開放され中華街の一部に組み入れられてゆく²¹。最後まで残っていたのが掘割周辺と市壁周辺だったが、それも、20世紀初頭の市壁撤去で市街の一部となった、という。

つまり、歴史的に言えば、公的世界 (王宮中心) と私的世界 (中華街) とを分けるために設定された「緩衝地帯」であり、20世紀初頭まで最後に残った「周辺地帯」であり、二つの世界の「境界領域」、後にはチャイナタウン (中華系) とパフラット市場 (インド系) のせめぎあう場。それが、バングラデシュ人たちが集中していた地区、ということになる²²。そ

19 ちなみに、タイ語で、Saphan = 橋、Han = 切れた、可動の。つまり、撥ね上げ橋。今は、狭い水路に架かった目立たないコンクリート製の橋だが、元は市街の門と中華街を結ぶ橋として掛けられたこと、水路 (= 市の堀) を通る船の通行のために可動式の本製の橋であったことから、この名前がある。同書によれば、かつては市の外壁があったため通行可能箇所が限られており、この橋が中華街の西端として非常に重要だった、とある。

20 市の外壁 (= 市壁) については限定的なことしか分からないが、友杉 [1994: 21-22, 45-46] から部分的に要約すれば、次のようになる。ラーマー一世は、トンブリからバンコク側に遷都し、ラタナコーシン王朝を始めるに当たって、特にビルマ人の攻撃に対する備えとして新たにバンランブーからオンアン水路を掘削し、その内側に城壁を築いた。城壁は、高さ 3.6m、幅 2.7m、延長 7.2km で、各所に砦が設けられていたが、バンコクの都市域が拡大する過程の1910年代に、ほとんどが破壊された、という。なお、現在、この城壁と砦の一部は、バンランブーとワット・サケットの向かいにかろうじて見られるだけである。

21 他方、市壁の西側 (パフラット地区側) は、すでに市壁撤去以前から徐々に人が入り始めていたが、オンアン水路の東側に比べて比較的人口密度が低いうちにインド系の人々が集中し始め、市壁撤去時には現在の「インド人街」の原型を形作っていたようだ。

22 サムベン街西部にはインド系も居住しているはずである。にもかかわらず、同書にはその記述が無い。代わりに、「The Muslim Presence」の節 [同: 95-104] (Sampheng Lane 南東部の「The Luang Kocha Isahak Mosque」の歴史と、マレー系ムスリムの動向について) では、次のような記述が見られる。現マレーシアの kedah 出身の祖先が19世紀に到来し、当時の東南アジア海域交易でリン

して、その場にいたバングラデシュ人たちの多くは、恐らくはオーバーステイ等の（タイ側からすれば）不法滞在者だったと推定される²³。まさに、彼らは「マージナルな場」にいた「マージナル・マン」であった。

iv) 「マージナル・マン」の姿が消えた、そして意外な場所に

2009年9月、筆者はまとまった研究時間を得ることが出来たので、彼らについて少し詳しく調べてみようと考えた。しばらく同地を訪問していなかったの、とりあえず様子を見に行ってみたところ、すでに表通り（チャカベット通り）で異変に気づいた。あの裏通りへ踏み込むきっかけになった角の旅行代理店がなくなっていて、その後を継いだ店からはベンガル語の表示が消えた。路地に入ると、バングラデシュ人の姿が無いどころか、人影さえほとんど見えないのである。その後、複数回同地を訪れ、顔見知りになったわずかに残ったバングラデシュ人店主（先に触れたM氏）やその代理であるT氏とかなり長時間立ち話していても、その間、ほとんど人通りがない。T氏は、最近のこの一角の状況を「冷えてしまった」と語ったが、実感の籠った言葉であった。T氏に、バングラデシュの人びとは消えたのか、



写真1：さびれたパフラット外れの一角。右手にベンガル語でレストランの看板が見える。その手前と左手奥にはゲスト・ハウスがあるが、人の気配はほとんどしない。

▽ ガ・フランカだったマレー語の必要のため、当初はマレー語通訳として公務員になったが、その息子が同モスクの創設者でマレー語通訳後継者であった Kocha Isahak。19世紀中期には、マレー系ムスリムや当時のマレー語リング・フランカで“lacars”と呼ばれたインド系ムスリムが交易のため多数来訪。礼拝の場所を求めるこれらの人々の要請を受け、Kocha Isahak が私財を投じて簡素な造りの礼拝所を設立したのが始まり。現在では、マレー人やマレー系タイ人のムスリムだけでなく、インド、パキスタン、バングラデシュ等の南アジア系ムスリムも金曜礼拝に集うようになっている、等々。これによれば、マレー系ムスリムはインド系ムスリムを“lacars”と一括りに把握していたようだ。なお、バングラデシュの人々がこのモスクに礼拝に来る、との点は確認できなかった。

23 注15参照。



写真2：バムルンラート病院前の通りのバングラデシュ人経営ゲスト・ハウス。店の表はカフェになっている。前は車の通が多い、スクムヴィット・ソイ3の通り。

と尋ねると、彼は「皆、中国に行ってしまった」と語る一方、バンコクにも居ることは居るが、「最近はスクムヴィット方面に多い。特にソイ3にはレストランがある。バムルンラート (Bamrungrat) 病院にもある。ソイ3に行ってみると良い」と教えてくれた²⁴。

スクムヴィット通りの入り口に近いソイ3に位置するバンコクー（東南アジアでもあるらしい）の大病院バムルンラート周辺を散策してみると、まず初めに歩道を歩くバングラデシュ人らしい夫婦の姿が目についた。次いでソイ3から病院に入る脇道付近に来ると、ベンガル語の看板が目に入った。バングラデシュ人経営のベンガル（ムスリム）料理レストランである。通りの向かいに目を転ざると、そこにはベンガル語の看板を掲げた数階建てのビジ

24 この一角からバングラデシュ人たちが完全になくなったというわけではない。現在、同地には少なくとも2軒のバングラデシュ人経営レストランがあり、顧客は主にバングラデシュから来るバイヤーである。ただし、その数は非常に少ない。2軒とも、レストランの売り上げだけでは食べてゆけないようだ。店のオーナーたちはバイヤーからの注文を受けて品物を揃える現地仲介者と、バングラデシュから直接注文を受けて集めた荷物を送る通関手続き代理人とを兼ねて、なんとか生き残っている、という感じだった。残念ながら、彼らが細部について言い渋ったため、これ以上の確認は取れていない。この一角にはその他にも数軒のインド人経営レストラン、同じくインド人経営旅行代理店、インド人経営ないしネパール人経営ゲストハウスも数軒残っているが、いずれの店も閑散としている。

直接会って話を聞くことが出来たバイヤー（50歳前後の、小柄な人）の語りを紹介しておく。「タイから布製品の買い付けをしている。今回も買い付けに来たところ。バングラデシュのガーマンツでは作っていない衣料品や高級品を中心に、その他の雑貨も含めて大量に買い付け、コンテナ1個分にしてからコンテナ船でチッタゴンに送る。そこで、荷を開き、一部をチッタゴンで降ろしてさばき、残りをダッカに陸路で運ぶ。荷の準備、買い付けからコンテナへの積み込み、タイ側の通関手続き、船積み、このプロセスに10日から15日。バングラデシュまで数日から1週間。バングラデシュでの積み下ろしから通関手続きに数日から1週間程度。バングラデシュでは、金を持っている連中が多いから、需要も大きく、すぐに売れる」。しかし、その割にはバイヤーの姿は稀であった。ここから推測すると、この一角は、元々バイヤーよりも「出稼ぎ狙い」の人々が集まる場だったのかもしれない。

ネスホテル風の建物が並んで建っていた。驚いたことには、同病院の長期滞在用ビル内部にまでバングラデシュ人経営のレストランがあった²⁵。言うまでもなく、これらのレストランやホテルは全てバングラデシュから同病院に「医療ツーリズム」目的で訪れる比較的豊かな人々（患者とその家族）をターゲットにしているのである。その意味では、まさに「グローバル化」時代を象徴するものである。病院入り口付近の好立地にバングラデシュ系の店が何軒もあるということは、それだけバングラデシュ人の顧客が多く、ビジネスとしても流行っているであろう。病院からは「アラブ人街」のナナが近いので、そちらに足を向けると、アラビア語表記が目立ち、トルコ料理店、イラン料理店等も多数ある中で、ここにもまたバングラデシュ人経営の旅行代理店があった。

バングラデシュ人たちは、「マージナルな場」であるパフラット外れの一角からほとんど姿を消した代わりに、現在のバンコクで最も賑やかな地区となりつつあるスクムヴィット通りの、巨大病院に近い表の場に堂々と進出していったのだ。そこにいる人びとは、言うまでも無く、もはや「マージナル・マン」ではなかった²⁶。

25 同病院の HP の “Services & Facilities” 欄 “Food & Beverage Services” の項目には次のような紹介がある。“Bangla House (BH Residence ground floor) Bangladeshi and Indian Halal foods served with utmost care in a cozy atmosphere. Delivery available.” 文中に “Bangladeshi” と “Halal” とあることから、バングラデシュ人経営のムスリムを主対象とする店であることが明らかであろう。同病院は、世界24カ国に代理店を構えるが、当然、バングラデシュも含まれている。ちなみに、同病院の HP によれば、2008年実績で、医師・歯科医師等1000人以上、看護師900人以上を抱え、年間の患者数110万人以上、そのうち40万7000人が世界119カ国から訪れる外国人患者という、とてつもない大病院である。

26 NAKAVACHARA [1993: 950-952] によれば、1980年代後半時点で、バンコク24区のうち、Pranakorn 区にインド系の33%が集中し、特にパフラット地区からサムベンにかけてはバンジャープ系（大部分がシク）が多い。また、スクムヴィット通り周辺には23%分布した、とされる。（データは “Bangkok Municipality Report” に基づく）。現在では、南アジア系の中でスクムヴィット通り近辺に居住する人々の占める割合は、さらに高まっているようだが、確認する資料がない。なお、シクやヒンドゥーの人びとは、アラブ人やバングラデシュ人が多いナナ地区近辺よりも、さらに東側からアソーク交差点方面に集中しているようだ。筆者は両者の分布の大まかな境界はアンバサダーホテル近辺、という印象を持っている。

ちなみに、同ホテル周辺では複数のバングラデシュ人が旅行代理店やレストランを営んでいるが、彼らは以前のようにバングラデシュを表に出してはいない。また、パフラット外れの地区に比べて、ビジネスは遥かに規模が大きくなっている。一例を挙げれば、同ホテル近辺に最近開業されたレストランの場合、同一オーナーは、すでに旅行代理店、輸出入代行、仕立屋、自社の小規模コンドミニアム（建設中）を所有・経営しており、それに次いでレストランを開業したことが確認できた。名義人は、いずれもタイ人女性だが、実体は、恐らく彼女の夫でベンガル人男性の所有・経営である。

なお、複数のタイ在住歴が長いバングラデシュ人に確認したが、バンコクにおいてバングラデシュ人たちの連絡組織等は存在しないようである。また、バングラデシュ大使館もバンコク在住バングラデシュの実態を把握していないようだ。したがって、ここでは筆者が確認しえた範囲で、印象論を交えつつ、話を進めることを断っておく。

3. 変貌する世界とグローバル化の影響

これまで記したバンコクにおけるバングラデシュ人社会の急激な変容（「マージナル・マン」から非マージナル化）、並びに、バンコク内部での地理的なシフト（パフラットの片隅からスクムヴィット通りへ）は、バングラデシュ人社会の「小さな」変化に留まるものではない。むしろ、この「小さな」変化は、かなり「大きな」世界の変化を示す氷山の一角のようである。以下では、ごく大まかにではあるが、その「大きな」変化に目を向けることから「小さな」変化を考え直してみたい。

i) グローバル化とバングラデシュ人社会への影響

a) 中国の台頭

先のT氏（バングラデシュ南東部フェニ出身）は、自らがマネージャーを務めるパフラット外れのレストランの状況を次のように語る。

「世界的な不況の影響で仕事はさっぱりだ。このレストランは開店してから5年半。自分は、もう何年か分からないくらいバンコクにいる。前は色んな仕事をした。今はここのマネジメントをしている。オーナーは別の人で、彼はカーゴ関係の会社なども持っていて、これ（=この店）は一部だ。この地区も前はもっと良かったが、今ではすっかりだめ。冷めてしまった。不況のせいもあるが、布や雑貨の仕事（貿易）はみんな中国に行ってしまったからだ。もっとも、今は中国も入るのに大変で、色々と書類を揃えて、細かく審査されるが。それでも皆中国に行く。今さらだめだが、自分も行っていたらな…。とにかく人も少なく、買い付けも少ないし、そのためにカーゴの仕事もほとんどない。この辺りのゲストハウスにいる連中も少ないし、彼らは“Hand Carry”だけ。小金を持ってきて、それで仕入れられるだけ仕入れて、全て Hand Carry だから、カーゴの仕事にならない。カーゴにするほど大量には買えないからだ。」

この語りから明らかになるのは、圧倒的なまでの「中国の台頭」である。かつてバンコクで布や雑貨を仕入れていたバングラデシュの人びとは、その大部分が中国に向かった。別の機会に彼に確認したところでは、具体的な地名として広州、義烏等の地名が挙げられた²⁷。その

27 広州は広東省の中心都市であり、近年では特に東アフリカから買い付け商人が多数集中することで知られる。義烏は浙江省のほぼ中心に位置する中都市だが、「義烏国際商貿城」という400万㎡にも及ぶとてもない雑貨卸売りセンターを擁し、そこでは6万以上のブースで40万種類以上の商品が売られている（同「商貿城」公式パンフレットより）。実際に目にするると、逆に一層信じがたいほどの規模である。読者には、日本の百円均一ショップの主要仕入れ地と言う方が分かり易いかもしれない。

結果、かつてこの地に多数来ていたバイヤーは大部分が姿を消したのである。現在同地に来ているのは、ハンドキャリー（＝飛行機への機内持ち込みや機内預け）だけで運べる程度の量の荷を扱う小粒な商人ばかりだから、通関代行の仕事も激減したのである。

パフラット市場との関連で言えば、特に縫製品への中国台頭の影響は大きかったと考えられる。なぜなら、パフラットは「布の街」でもあるからである。パフラット市場はタイ・シルクを始めとする各種の布地が非常に豊富である。そのパフラット外れの一角にバングラデシュ人が集中していたということは、単に同じ南アジア系の人々が集中しているとの理由だけでなく、恐らくバイヤーたちの主要取り扱い製品が布や縫製品であったことと関連している。また、同地で出会ったバイヤーからは「ボーベ市場」からも買い付けると聞いた。パフラットはボーベ市場（こちらは比較的低価格の縫製品中心）にも比較的近い。つまり高級布地から低価格縫製品まで、布や縫製品を扱うには非常に便利な場所だったのである。

b) バングラデシュ国内産業の台頭

縫製品に関しては、バングラデシュ国内における縫製産業の台頭も考える必要がある²⁸。国内の縫製産業が巨大になったため、衣料品の品質向上、多様化、国内における価格の相対的な低下が生じ²⁹、結果的には競合する価格帯、品質の縫製製品の輸入必要性が減少した。その影響を被ったのがタイからの輸入縫製品だった可能性は高い。

また、縫製品ばかりでなく、バングラデシュの国産雑貨の多様化、品質向上にも目を向ける必要があろう。もちろん、中国からは各種雑貨が大量に輸入されている³⁰。しかし、その一方で、バングラデシュでも国産品雑貨が多様化し、品質も向上した³¹。そのため、タイからの雑貨等の輸入必要性がかなり低下しているのである³²。

これらの結果、タイからバングラデシュに衣料品・雑貨等を輸入していた人々がタイに拠

28 バングラデシュの縫製業に関し、簡単な紹介は山形 [2009] 参照。現在、縫製業は同国の輸出総額の約 8 割を占める巨大セクターになっている。

29 ごく大まかに言えば、「輸出向け縫製産業が繁栄→輸出検査で撥ねられる二級品の発生、ないし受注ロットの誤りや変更などの結果、一級品であってもローカル市場に出さなければならない品物が発生→これらの品物がローカル市場に溢れる結果、高品質の縫製製品が多種多様・大量・安価に供給される」といったメカニズムが働いたと考えられる。

30 先に触れた中国「義烏」の地名は、端的にこのことを物語っている。

31 これは何よりも縫製産業に従事する女性たちの現金収入が増加し、消費が拡大したことが影響しているようだ。特に、低価格帯の化粧品、生活雑貨等では、中国製品との競争に耐えつつ、品種が多様化し、品質も向上している印象を受ける。同国の最新の経済統計では“manufacture”部門の最近 3 年間の伸びは年率 6 % 前後であり、GDP 成長率と同等かそれを若干上回る伸び率を示している、と報じられていることが間接的な例証となろう（The Daily Star 紙インターネット版、2010年 5 月 28日、“Per capita income crosses \$700”）。

32 さらに、バングラデシュ国内での国内雇用創出が影響している可能性もある。バングラデシュ国内では縫製産業の活況化等により経済全般も急激に上向している。そのため、商売の可能性が増え、バンコクで小商いをしていた層の若年・中年男性の中にバングラデシュ側で商店主・バイヤーとなる例が出た、との可能性だが、この点については検証が必要である。

点を置いて商売をする必要性が大幅に低下した可能性が高いのである。

c) 日本や韓国への「出稼ぎ」減少の影響

日本や韓国（一部には台湾）への「出稼ぎ」が減少したことも大きな理由ではないか。日本ではヴィザなし渡航を禁止した後に警察の取締りが厳しくなり、また入管での水際の阻止も急激に高まった。この結果、勉強等を名目にして日本に出稼ぎに行くことが極めて難しくなった。韓国では公式の外国人労働者受け入れ政策が開始され、以前のように私的にもぐりこむ必要がなくなった上に、公式化と表裏一体で、もぐり行為の摘発がきびしくなっている³³。台湾では、中国との関係改善と経済関係強化が進み、大陸への進出で国内での労働者需要が減少している上に、東南アジアからの労働者が公式に受け入れられているため、南アジア系の入り込む余地が大幅に少なくなっている³⁴。他方、中国は経済ブームであるとはいえ、今のところ出稼ぎ先としては考えられない。

ただし、バングラデシュを初めとする南アジアからの出稼ぎ自体が減ったわけではない。世界経済の変化を受け、出稼ぎ先が変化したのである。東南アジアで言えばマレーシアが台頭したが、マレーシアにはダッカからマレーシア航空が就航しており、また準公式の出稼ぎ契約でダッカから直接行くため、バンコクで出稼ぎ先への準備をする必要はない。また、シンガポールは、直行便があること、出稼ぎ先としては規模が小さいことに加え、近年はむしろ締め付けが厳しいようである。他方、相変わらず中東への出稼ぎは多いものの、それにはバンコクは全く関与できない。

以上の結果、東アジア方面への私的ないしブローカー頼りの出稼ぎの中継地としてバンコク（特にパフラット周辺）が果たしていた役割は、ほぼ終焉を迎えている。かつてパフラット外れのゲストハウス周辺でたむろしていた明らかに「出稼ぎ狙い」の男たちの姿が今ではほぼ見られなくなったのも、こうした推測を裏付けるものであろう³⁵。

ii) タイ社会への影響と都市バンコクの変貌

a) パフラット地区の停滞、チャイナタウンの相対的な地位低下？

パフラット外れのバングラデシュ人たちが集中していた一角だけが急激に寂れたわけでは

33 韓国におけるバングラデシュ人労働者については三宅 [2009b] 参照。

34 一例を挙げると、台湾台中市の駅近辺で筆者が見た限りでは、ベンガル語の看板が若干残っているものの、バングラデシュ人と思しき人はいくつかは見かけなかった。同地に居住する人の話では、最近、彼らの姿をほとんど見かけない、とのこと。他方、フィリピン人、タイ人、ヴェトナム人やインドネシア人は多数見かけたし、彼らを相手とする商店も多数見られた。

35 今となっては確認する方法がないが、大きな転換点となったのは、恐らく1997年のタイ発世界金融危機であろう。東アジアへの出稼ぎが難しくなっていたことに加え、出稼ぎのハブ、バイヤーの買い付け拠点でもあったバンコクを、この金融危機が直撃したことで、パフラット外れにおけるバングラデシュ人たちの活動は大きな打撃を受けたと考えられる。

ない。むしろパフラット市場一帯がピークを過ぎた感を受ける。いつ行ってみても人通りが少ないのである。インディアン・エムポリウムの中も、日曜の夕方近くに行った際にはガラガラ。2階以上の階では、ほとんど客の姿をみかけなかったほどである。さすがに表通り（チャカペット通り）の歩道には歩行者が絶えないものの、その数も少なくなっている感じがする。以前なら、狭い歩道ですれ違うのに、しばしば立ち止まって待たなければならないほどの混み方だったが、最近ではほとんどすれ違うのに苦労しない。この傾向は横道に入ると一層顕著である。インディアン・エムポリウム裏手に行けば、明らかに以前とは違うことが分かる。本来なら買い物客が多いはずの平日の昼間でも人通りは少なく、その奥のパフラット市場中心部に当たるゴチャゴチャした商店街も全く活気がない。シャッターを下ろした店舗もかなり見受けられるのである。

さらに言えば、チャイナタウンでさえも、中心街はともかくとして、パフラット地区に近い西部では、以前よりも活気が薄れている印象を受ける。以前のような猥雑さと怪しさを伴う活気はどこかに消え去ったようだ。

b) スクムヴィット通りの興隆

これと対照的な動きを見せているのがスクムヴィット通りである。元々、サイアムに近い方からアソーク交差点辺りまではある程度賑やかだったものの、その先は比較的落ち着いたたたずまいを見せていた。例外的にトンロー（スクムヴィット通り、ソイ55）に店が集まっていたが、かつては行き止まりに近い状態だったため、店の多いのはソイの中ほどまでであった。ソイの一番奥に近い所にバングラデシュ大使館があったため、その記憶は鮮明である。ところが、今回驚いたのは、スクムヴィット通り一帯の大きな変化である。かつては、通り周辺だけが賑やかだったが、今では南北に奥へ深化している。北はセンセーブ運河まで、南はラーマIV世通りまで、ほとんどあらゆるソイに店が登場している。それも、イタリアン料理店等の外国レストランからブティック、ショッピングセンターまで実に多彩である。ソイ3～13の辺りはアラブ人を始めとする外国籍ムスリムたち（中にはアフリカ人も多数）、ソイ11～アソーク交差点にかけては多数のインド系の人々が多数見られる。その反対側（南側）は韓国人街、プロンボン駅周辺からトンローにかけては日本人街の様相を呈している。

しかも、通りの賑わいは先へ先へと東に拡大を続けている。かつてはエカマイ通り（スクムヴィット、ソイ63）とその交差点そばにある東バスターミナルを越えれば、急に庶民の町、郊外の印象が強かったが、今では BTS 終点オンスットの先まで、ずっと商店が立ち並び、コンドミニアムも多数見られる。バンコクの中では地価上昇の激しいのがスクムヴィット通り周辺だと報じられており、2008年末からの世界経済停滞でタイの不動産業界も苦しむ中、2009年11月の雑誌報道では、スクムヴィット通りソイ24の高級コンドミニウムが売り出し当日に完売して業界人を驚かせた、とのエピソードもある。まさにスクムヴィットの価値上昇を証

明している。

c) 都市バンコクの重心が移りつつある？

このような展開の背景には、いくつかの大きな要因があるようだ。一つには、先に触れた BTS の影響が挙げられよう。1999年に開通したこの新交通システムは、バスに比べてかなり割高であったため、当初は乗る人も少なかった。しかし、タイの経済発展に伴って BTS に乗るだけの経済的余裕が人々に生まれたこと、モータリゼーションが一層進み、バンコク市内各所で渋滞が深刻化したこと等のため、利用者が増えた。今では朝晩のラッシュ時には乗り切れない人が駅に取り残されるほどまでになっている。また、BTS に遅れて開業した地下鉄（以下、MRT）も5年が経過し、こちらもすっかりバンコクに定着した。BTS の主要路線であるスクムヴィット線はスクムヴィット通りの上を通っている。BTS や MRT の最大の利点は移動時間が確実に読めることである。BTS がオンヌットまで開通したため、スクムヴィット通り周辺はオンヌットの先にまで一気に沿線が開けるようになった。また、MRT が BTS とアソーク交差点で交わり、アソークには乗換駅ができた。アソーク交差点は乗り換え客が多く、これもスクムヴィット通り周辺の重要性を高める要因となっている。BTS スクムヴィット線の延伸工事はかなり進んでいて、2011年開業予定である。これが実現すれば、スクムヴィット通りの賑わいはさらに先にまで広がることはほぼ確実である。

もう一つ見逃せない大きな要因は空港移転である。国際線は基本的にバンコクの北方に位置するドンムアン空港からバンコク東部のスワンナプーム空港に移された。ドンムアン空港は小規模維持されているものの、一部の格安国内線専用と化しつつある。施設も老朽化し、それを更新する様子も無い。同時に、1997年のアジア経済危機をきっかけとした鉄道高架化工事の中断で、バンコク中心部から北部に延びる鉄道計画は頓挫し、建設途中で放置された橋脚が無残な姿をさらしている。バンコクから北に向けての交通網は、高速道路を除けば、ほぼチャトチャク近辺で整備が止まったままである。これに対し、新しく開港したスワンナプーム空港は、敷地面積でドンムアン空港の3～4倍、施設も新しく、さらなる拡張計画さえ噂される。空港に通じる高速道路が整備され、新鉄道空港線も完成に近づいている。

このため、バンコク市街は、北部に向かって伸びつつあったのが止まり、今では東部に向かって急激に展開しつつあるようだ。市街地域が東に延びてゆけば、当然、都市バンコクの重心も東に移動するであろう。バンコクで、かつて歓楽街と言えばパッポンの名が挙がったが、今ではスクムヴィット通りのナナからアソーク交差点傍のソイ・カウボーイ周辺までの賑わいもそれを上回る勢いである。バンコクで最もファッショナブルな地区は、かつてはサイアム周辺であったが、今ではトンローからエカマイが最先端の地区として浮上している。

結局、パフラット外れのバングラデシュ人たちが集中していた一角の廃れ方、それに対するスクムヴィット方面でのバングラデシュ人たちの新たな拠点化という変化は、一方ではグ

ローバル化と世界経済の変化に対応したバングラデシュ人たち個々の動きが集積した結果でありながらも、他方では、実は都市バンコク自体の変貌の、都市バンコクの重心が西から東へと移しつつあることの、ささやかな反映であるのかもしれない。

お わ り に

本稿で取り上げた問題を、タイ社会全体に目を向け、タイ社会全体との関わりで考えてみるならば、別の見え方も浮かび上がる。末廣 [2009: 23-29] は、20世紀中期からのタイ経済について、①1958-87年=「発展途上国の時代」、②1988-96年=「中進国化の時代」、③1997年以降=「選択の時代」との時代区分を提起する。そして、「アジア通貨危機がタイ経済の脆弱性を暴露し、タイ社会に不安定性をもたらした」が、「そこから「選択の時代」が始まった」[同: 27] と指摘する。本稿で記した、バンコクのバングラデシュ人社会の変化は、タイが「発展途上国の時代」から「中進国の時代」へと姿を変える時期にパフラットの片隅に花開き、「選択の時代」が定着した中で、その花を閉じた。2010年5月末、タイは、「赤シャツ」の騒乱と、それを暴力的に沈静化させた後も、次なる変化の途上にあるように見える。タイの次なる「選択」は、バンコクのバングラデシュ人社会にどのような影を落とすのであろうか。

参 考 文 献

- 浅見靖仁, 2003, 「国際労働力移動問題とタイ—研究動向と今後の課題—」『大原社会問題研究所雑誌』530, pp.22-43.
- チットムアット, サオワニー, 2009a, 「タイ・ムスリム社会の位相—歴史と現状—」(高岡正信訳, 林行夫編著『〈境域〉の実践宗教—大陸部東南アジア地域と宗教のトポロジー—』京都大学学術出版会, pp.677-728.
- , 2009b, 「タイ・ムスリム関連資料」(高岡正信訳, 林行夫編著上掲書, pp.813-825).
- HUSSAIN, Zakir, 1982, *The Silent Minority: Indians in Thailand*, Social Research Institute, Chulalongkorn University, Bangkok.
- 今永清二, 1992, 『東方のイスラム』風響社。
- 柿崎一郎, 2007, 『物語タイの歴史—微笑みの国の真実—』中央公論新社。
- 小泉順子, 2006, 「タイ中国人社会研究の歴史性と地域性—冷戦期アメリカにおける華僑・華人研究と地域研究に関する一考察—」『東南アジア研究』43-4, pp.437-466.
- MANI, A., 1993, "Indians in Thailand", in K.S. SANDHU and A. MANI eds., *Indian Communities in Southeast Asia*, Institute of Southeast Asian Studies, Singapore, pp.910-949.
- 三宅博之, 2009a, 「豊かな生活を求めて—海外出稼ぎ労働者—」, 大橋正明・村山真弓編著『バングラデシュを知るための60章』(第2版), 明石書店, pp.215-220.
- , 2009b, 「韓国・バングラデシュ関係と韓国のバングラデシュ人労働者を取り巻く状況」『バングラデシュの社会経済的格差と労働移動に関する実証的研究: 境界を越える人々』(文部科学省委託研究プロジェクト「世界を対象としたニーズ対応型地域研究推進事業」研究成果報告書, 研究代表: 山本真弓), 山口大学, pp.xxxiv-xi.
- 村山真弓, 1993, 「バングラデシュの労働事情と海外出稼ぎによる雇用への影響」, 長谷安朗・三宅博之編『バングラデシュの海外出稼ぎ労働者』明石書店, pp.143-162.

- 日本タイ学会編, 2009, 『タイ事典』 めこん。
- NAKAVACHARA, Netnapi, 1993, “Indian Communities in Bangkok: Pahurat and Ban-Kaek”, in K.S. SANDHU and A. MANI eds., *Indian Communities in Southeast Asia*, Institute of Southeast Asian Studies, Singapore, pp.950-975.
- 小河久志, 2009, 「イスラーム教育の変容と多様化する宗教実践—タイ南部ムスリム村落の事例から—」『イスラーム世界』72, pp.27-60.
- GILQUIN, Michel, 2005, *The Muslims of Thailand*, IRASEC and Silkworm Books, Bangkok (translated by Michael Smithies from original French edition published in 2002).
- 佐藤 宏, 1995, 『タイのインド人社会—東南アジアとインドの出会い—』アジア経済研究所。
- SATYAWADHANA, Cholthira, and Davisakd PUAKSOM eds., 2009, *Selected Readings on Thai Studies Vol.1: Muslim identities and Thainess*, Walailak University, Nakhon Si Thammarat.
- SCIORTINO, Rosalia, and Sureeporn PUNPUING, 2009, *International Migration in Thailand 2009*, International Organization for Migration, Bangkok.
- STERN, Aaron, 1998, *Thailand's Migration Situation and its Relations with APEC Members and Other Countries in Southeast Asia*, Asian Research Center for Migration, Institute of Asian Studies, Chulalongkorn University, Bangkok.
- 末廣 明, 1993, 『タイ—開発と民主主義—』岩波新書。
- , 2009, 『タイ—中進国の模索—』岩波新書。
- 菅原茂樹, 1993, 「モハマドが日本に残した軌跡」, 長谷・三宅編, 上掲書, pp.21-60.
- 友杉 孝, 1994, 『バンコク歴史散歩』河出書房新社。
- 坪内良博, 2002, 「都市フロンティアとしてのバンコク」『三田学会雑誌』95-2, pp.17-30.
- Van ROY, Edward, 2007, *Sampheng: Bangkok's Chinatown Inside Out*, Chinese Studies Center, Institute of Asian Studies, Chulalongkorn University, Bangkok.
- 山形辰史, 2009, 「工業国としてのバングラデシュ—製造業—」, 大橋・村山編著, 上掲書, pp.128-132.
- 吉成勝男, 1993, 「国際都市 TOKYO—バングラデシュ人とともに—」, 長谷・三宅編, 上掲書, pp.61-90.

Summary

Bangladeshis in Bangkok

—Preliminary consideration on them in the changing Thai society
and in the age of globalization—

TAKADA Mineo

Thailand situates just between East Asia and South Asia and its capital city Bangkok occupies the position of a center of Southeast Asia. Though the city is a place of Southeast Asia, we can find many South Asian or South Asian descendant people there. This paper focuses on the Bangladeshi society in Bangkok, which experiences rapid changing since mid 1980s, and discusses it in the relationships with the changing Thai society and also with the age of globalization.

At first, the fact that there were and are very few studies conducted in relation with the South Asian people and on their descendants is pointed out. It is also pointed out that there are few reliable data or statistics on so-called Thai-Muslim, except Malay-speaking people living in the Southern provinces of Thailand. The author suggests that this is partly because the “self-portrait” of Thailand in which the nation is officially a “homogeneous society” and the majority of it are Thai-speaking Buddhists. Both of “South Asian” as well as “Muslim” are not match with this official portrait. In this sense, the South Asian Muslim such as Bangladeshi is a minority in double meaning; they are at the same time “South Asian” and “Muslim”. That is, they are “minority within minorities.”

Next, this paper discusses on a specific place where many Bangladeshis had concentrated; Pahurat, or strictly speaking, the outskirts of Pahurat area, western part of Bangkok. From the mid 1980s to 1990s, we found many Bangladeshis in the area. That was a meeting point and place of information exchange of people those who headed to and come back from Japan or South Korea. Pahurat was, in this sense, a “hub” of the migration and information flow between South Asia and East Asia.

Today, in 2010, that place, i.e., the outskirts of Pahurat is almost empty and we seldom find Bangladeshi there. Instead, we can find many established restaurants, guest houses or travel agencies in Sukhumvit area, eastern part of Bangkok. Relating to the reason of this shift of

place, the rise of China in international economic scene, the economic development of Bangladesh, and the rapid transformation of the Bangkok city are discussed.

Lastly, these are pointed out that this shift of place, from Pahrat to Sukhumvit, is partly a result of accumulation which each Bangladeshi individual chose their own activity, and that it is also a reflection of the moving of the gravity of Bangkok city itself.